

趙樹理文学における文芸大衆化¹

— 1930年代太原を舞台に —

内 藤 忠 和

はじめに

ある作家の生涯を貫く思想、あるいは作風というものがあるとして、それはいつどのようなプロセスを経て獲得されるのであろうか。

中国現代・当代文学を代表する作家のひとり、趙樹理（1906–1970）に関する一連の評価に目を向けると、1943年のデビュー当時から死後30余年を経た現在に至るまで、一貫して変わらぬ言葉が見出されることに気付かされる。

まず、趙の文学に対して初めて全面的な評価を試みた周揚は、デビューして数年目の彼の事を“斬新で独特の大衆的風格をもった人民芸術家”と評し²、趙とはほぼ同じ時期に作家として頭角を現した孫犁は、彼の死後、“彼の小説は、従来解決が難しかった文学大衆化の難関を突破した”と称えている³。さらに、1997年に出版された『趙樹理小説全集』編集後記⁴においても、“文芸の大衆化、民族化の方面において非凡な卓越した貢献を残した”とあり、趙樹理には絶えず“大衆的”，“大衆化”という言葉が冠されてきた。

こうした評価からも明らかのように、趙は終生大衆のため、とりわけ農村大衆のために農村を題材とした作品を書き続けた。そしてそうした彼の“大衆的”作風は、1942年、毛沢東の『文芸講話』において提起された“普及の問題”に解を提出したのとして文学史上に位置づけられている⁵。

では趙樹理は、この“大衆的”と評される作風を何時どのようにして手に入れたのであろうか？

1. 問題の所在

中国現代文学史上、上述の“大衆化”の問題は、『文芸講話』に於いて初めて提起されたものではなく、その源流は1930年代初めの文芸大衆化運動まで遡る事が出来る。そして趙樹理が大衆化への歩みを始めたのも、『文芸講話』発表以前、概ね1930年代前半のことであったと思われる。

趙樹理同志说：“在十五年以前（1932年を指す、筆者）我就发下洪誓大愿，要为百分之九十的群众写点东西，那时大多数文艺界朋友虽然已倾向革命，但所写

的东西还不能跳出学生知识分子的圈子,当然就谈不到满足广大劳动群众的需要.根据我自己的志愿,一九三三年我在太谷当教员时,曾写过一部长篇小说,名字叫「盘龙峪」,是描写农民和封建势力作斗争的故事”

(「人民作家趙樹理」柴安『天津日報』1949年10月1日) ⁶

我有意识地使通俗化为革命服务,萌芽于一九三四年,其后一直坚持下来.⁷

(下線は筆者付す)

上の趙の発言を見る限りでは、彼が大衆化に取り組み始めたのは1932年、あるいは1934年のことであり、その具体的な成果として「盤龍峪」という作品が挙げられる⁸、ということになる。しかし、趙が大衆化に志した動機、背景そしてその具体的なプロセスについて、趙自身はほとんど語ってはいない。

では、続いて趙の友人たちの証言及び先行研究に目を向けてみたい；

从一九二八年起,就萌生了以文艺为农民服务的志愿……一九三〇年开始,文艺界在左联的领导下,先后几次展开了文艺大众化问题的讨论.这种讨论也引起了赵树理深切的注意.在讨论中,有人谈到文艺的通俗化时,把通俗性和艺术性对立起来,提出通俗化的作品只是适应一时的需要,过些时候就不要了.赵树理不同意这种意见.他认为通俗化和艺术性是可以统一起来的.农民理解的作品不一定是低级的作品,谁能说「水浒传」是低级的!农民和知识分子对艺术的爱好不同,谁高谁低,不能遽然就下结论.他把他的主张写成短论投寄当时刊物,未被采用,便自己着手创作.

(「趙樹理の創作在文学史上的意義」刘泮溪『山東大学学报』1963年1月号) ⁹
但是从学校出来以后(1928年を指すと思われる¹⁰、筆者),他的创作思想变化了,他说要使文艺为群众接受,非通俗化不可.

(「(「趙樹理怎样成为作家的?」)王春『人民日報』1949年1月16日) ¹¹

一九三〇年前后,在党领导的“左翼作家联盟”的影响下,他开始了文学创作,而发表的第一部中篇小说「铁牛的复职」,就是写农民的.……此后,“左联”和鲁迅先生对他的影响越来越深,他歌颂农民,反映农民的斗争和生活也就愈加自觉.一九三二—一九三六年间,他在太原某小报副刊上发表过很多作品,不是用短篇小说来揭露社会的黑暗,唤醒工农起来革命,就是用文艺评论来大声疾呼地提倡文艺创作的大众化.

(「太行人民的兒子」王中青『山西日報』1978年10月15日) ¹²

(下線は筆者付す)

上のように、趙が大衆化の方向性を持ち始めた年代については、趙自身の発言

とは異なり、1928年とする説（刘泮溪・王春）が挙げられており、さらに1932年から36年の期間においては、既に文芸大衆化を提唱する評論を発表していたという証言（王中青）も存在する。そして、趙自身は触れていない背景については、1930年に成立した左翼作家連盟（以下左連）、とりわけ左連初期の中心課題のひとつであった文芸大衆化運動の影響を指摘している（刘泮溪、王春）。しかし、文芸大衆化運動から趙が具体的にどのような影響を受け、自らの文学の大衆化を目指したのか、ということまでは言及がなされていない。

このように、趙樹理文学の大衆化という問題については、その年代に関しては説が分かれ、その背景、及びプロセスについてはまだまだ明らかにされていない部分が多いことがわかる。

これは、1930年代に書かれた趙の初期作品の多くが長年発見されず、もっぱら証言に頼らざるを得なかったこと、そしてそうした初期作品を多く収録した『趙樹理全集』¹³刊行後もなお未発見の資料が多く、決定的な説が出にくかった、という資料上の制約が関係している。

そこで本稿では少々焦点をずらし、趙の周辺にも目を向けてみることによってこの問題を解く手がかりを見つけていきたい。すなわち、趙樹理が創作活動を開始し、大衆化を模索していた時期、彼の周囲に居た友人たちはどのような文芸思想を持ち、互いに影響しあっていたのか、当時の趙を取り巻く空気のようなものを明らかにしていくことによって、彼の成長の痕を少しでも明らかにしたいと考えている。

今後進めていく具体的な作業としては、まず、趙に影響を与えたという指摘がある文芸大衆化運動の流れとその主張についてまとめる。続いて1930年代に趙の友人たちが編集執筆し、趙自身も筆を執った雑誌・新聞を詳細に見ていくことによって、当時の趙樹理及びその周囲の人々がどのような文学的主張をもっていたか、また文芸大衆化の主張をどのように受容し、自らの大衆化論を形成していったのか、そのプロセスを明らかにしていく、ということにしたい。

2. 文芸大衆化運動

前章で触れたように、趙は文芸大衆化運動の影響下において自らの文学の大衆化を進めた、という友人たちの証言がある。ではこの文芸大衆化運動とはそもそもどのようなものであったのだろうか、趙たちの大衆化の受容を測る指標とするためにもここで簡単にまとめておきたい¹⁴。

文芸大衆化の主張そのものは、早くは1928年の革命文学論争の頃から登場している。しかし、具体的に解決すべき課題として取り上げられたのは1930年3月、左連の成立以後のことであった。

上海で左連が結成された当時、その下部組織として「マルクス主義文芸理論研究会」、「国際文化研究会」とともに「文芸大衆化研究会」が設けられている。同時に雑誌『大衆文芸』、『拓荒者』においてもこの問題は取り上げられ、魯迅、郭沫若、鄭伯奇などの数篇の論文が掲載された。

しかしこの時点では；全面的な大衆化は机上の空論であり、難易度が異なる文芸によって様々な読者の需要に応えるべきであるとする意見（魯迅）や、大衆文学とは大衆を教え導く文学であると言い切る見方（郭沫若）など、論者の間に見解の相違はあったものの、全体的には大衆化の必要性の確認と“作家の立場”，“大衆性と芸術性”，“旧形式の利用”，“言語問題”といった問題の提起にとどまり、運動自体は発展を見ずに一時中断する形となった。

1931年の柳条湖事件（9.18事変）、そして翌32年の上海事変を経て中国の民族運動は高揚期に入り、それに伴い文芸大衆化運動も再び盛り上がりを見せる。左連は9.18事変の後、「中国無産階級革命文学の新任務」を発表し、文芸大衆化を自らの最大の問題であると規定した上で、通信員運動、壁新聞運動、文学者自身、及びその作品の大衆化 などの具体的方策を打ち出した。

一方この時期には、再び文芸大衆化に関する論文も多数発表されていたが、中でも中共中央総書記の職を辞した瞿秋白の論文「プロ大衆文芸の現実問題」、「大衆文芸の問題」が最も体系的かつ影響力が大きかったと言える。

以下にこの2篇の内容をまとめておく¹⁵：

まず、瞿秋白は冒頭の総論に当たる部分において；

中国的劳动民众还过着中世式的文化生活。说书，演义，小唱，西洋镜，连环图画，草台班的“野蛮戏”和“文明戏”……到处都是；中国的绅士资产阶级用这些大众文艺做工具，来对于劳动民众，实行他们的奴隶教育。¹⁶

というように中国の労働民衆が、いまだに講談、俗謡といった劣悪な大衆文芸に支配されている、という現実を指摘している。

それに対して、五四新文化運動によって生み出された白話は民衆と無縁であり、我々は民衆の中に入って新たにプロレタリアの革命的な文芸を創造しなければならない、と主張した上で、大衆的プロレタリア文芸を生み出すためには、言語、形式、内容など各方面において解決すべき問題が存在すると言う。

そして、まず言語問題に対しては；

至于革命的大众文艺, 尤其应当从运用最浅近的新兴阶级的普通话开始.¹⁷
というように文言, 旧小説の白話, 五四式白話に反対し、現在大都市と工場の中で育ちつつある「現代の普通话」を用いるようにしなければならない、と提唱している。

続いて作品の形式と内容の問題については、故事、説書、歌曲、連環画などの旧形式の長所を利用しつつ改革を加えて、新しい形式を創造していき、そして群衆の日常生活が常にどのような反動意識の束縛を受けているのかをはっきり見定め、全てのさまざまな化けの皮を暴かなければならない。また現実の革命闘争を反映し、現実の革命的英雄、とりわけ群衆の英雄をうまく表現しなければならない、と方向性を示した上で、最後に；

革命的大众文艺的创造, 是一个伟大的艰难的长期的斗争, 应当要和极大广泛的劳动民众联系着, 应当造成劳动者的文艺运动的干部. 这都需要刻苦的切实的有组织有系统的工作.¹⁸

というように革命的大衆文芸の創造には、長期にわたる組織的・系統的作業が必要である、と結論づけている。

この瞿秋白の論に対し、矛盾はこれを大筋では認めつつも、実作者の立場から以下のような批判を加えている¹⁹；

- ・新興階級の「共通語」はまだ地方的現象にすぎない
- ・文芸は当面「新文言」に頼らざるを得ない
- ・旧小説が大衆を捉える原因は、ことばよりもその行動を中心に置く描写法にある

これに対し、瞿秋白は「再論大衆文芸答止敬」²⁰の中で；

- ・大衆からすれば、どんな言葉で書くかが先決問題であり、新興階級の共通語を創造することが緊要である。

と反論するが、論争はここで中断し、「上海における大衆化運動は、実践の場、検証の場が乏しいまま終わらざるを得なかった」²¹。

3. 1930年代初期の趙樹理と雑誌『夜光』²²

前章では、本論の背景となる文芸大衆化運動について概観してきた。上海の文壇中央において展開されたこの運動は、『大衆文芸』、『拓荒者』、『文学導報』といった左連の媒体を通じて中国全土に広まったと考えられるが、中央を遠く離れ

た山西の地では、どのように受容されたのであろうか？

本章では、1930年代初めに山西省太原において発行され、趙の友人が参加していた雑誌『夜光』に注目し、当時、文芸大衆化の思想がどの程度受容されていたのか、そして趙および彼を取り巻く友人たちがどのような文芸思想を持ち、どのような作品を創作していたのか、見ていきたい。

3.1 『夜光』について

まず、本章で対象とする雑誌『夜光』の概要について紹介しておきたい。

この雑誌は“為長夜孤光、永燃不滅”（創刊号「本刊的使命」）をスローガンに、1931年10月に山西教育学院の同人誌として創刊されている。ちょうど創刊の1ヶ月前、1931年9月には柳条湖事件（918事変）が発生しており、太原においても大規模な学生運動が展開していた²³ことから、この『夜光』もこうした時代の潮流に乗じて誕生したと考えられる。以後、2期（1931年12月）、3期（1932年1月）と不定期に発行を続け、現在では5・6期（1932年12月）まで目にする事ができる。

『全国中文期刊聯合目録』²⁴によると、北京大学図書館、南京図書館にも所蔵が確認されており、少なくとも学内のみではなく、全国的に発行されていた雑誌であることが分かる。また、『中文期刊大詞典』²⁵には以下のように『夜光』の内容を紹介するコメントがあり：

該刊以向国人灌输各种知识，“以救助中国之危亡”为宗旨，刊有大量有关社会问题和教育问题的讨论文章，还有诗歌、小说、戏剧研究、以及剧本等、并有文艺专号。

この雑誌が社会問題・教育問題を論ずるほか、文芸創作・評論も掲載した総合雑誌であり、その目的が中国の啓蒙・救国を目指したものであったことが分かる。

そして何よりも注目すべきは、この雑誌には趙樹理の友人であり、当時山西教育学院に在学していた史紀言、王中青が参加しており、趙は彼らを通じて、『夜光』に長編詩「歌生」を発表している、さらに、発行されていた時期がちょうど文芸大衆化運動のそれと重なっているため、山西省における文芸大衆化思想の受容と当時の趙をとりまく空気を探るには絶好の資料である、と考えられる点である。

3.2 『夜光』における文芸大衆化論の受容

本節においては、『夜光』誌上における文芸思想がどのようなものであったのか、また文芸大衆化論の受容がどの程度進んでいたかを明らかにするため、『夜

光』誌上に掲載された文芸関係の論文を取り上げ、その内容を検討していきたい。まずは『夜光』創刊号から5・6号に掲載されている文芸関係の論文の題目を列挙する：

創刊号（1931年10月10日発行）

- ①「文言文最後勝利」（光前）
- ②「詩歌与社会」（連上福）
- ③「表現主義文学的研究」（史闕文）

第2期（1931年12月10日発行）

- ④「中国近十年来文化運動的基本傾向—由整理到批判—」（季権）
- ②'「詩歌与社会」（続）
- *「中秋感懷」（蕉圃）

第3期（1932年1月10日発行）

- ⑤「三民主義的文芸之社会的試解」（季権）
- ⑥「国難期間应有的文学」（光前）

第4期（1932年5月10日発行、“文芸専号”）

- ⑦「怎样才够得一篇不背时代的文艺作品」
- ⑧「对于光前君的「国難期間应有的文学」的批评」
- *「洛阳之行」（史紀言）
- *「歌生」（趙樹理）

第5・6期（1932年12月10日）

*文芸関係の論文なし

このように計8本の文芸関係の論文が掲載されている。これらの論文を概観してみると；創刊号および第2期、すなわち論文①から④までの内容は、文言／白話の問題（①）、ドイツ表現主義の紹介（③）、胡適の国故整理の批判的紹介（④）など、基本的に啓蒙的な内容となっており、文芸大衆化の主張は全くと言って良いほど見当たらない。せいぜい連成成立前に盛り上がった革命文学に対する言及が見つかる程度である。

文芸大衆化運動の主張に比較的近いものが登場するのは第3期の論文⑤、論文⑥であるが、これ以後雑誌の方向性が大衆化一色に変わったということもなく、論文⑧では論文⑥に対する芸術至上主義の立場に立った批判も展開されている。

では、以下に論文⑤、論文⑥の内容を紹介し、『夜光』同人の間では文芸大衆化論がどの程度受容されていたのか、分析してみたい；

論文⑤「三民主義的文芸之社会的試解」では、まず冒頭において、マルクス唯物史観が社会のみならず文芸、科学、宗教までも呑み込みつつある、と中国の現状を分析しており、ここで始めて左連についても言及している；

以我国为例：如大名鼎鼎的郭沫若及创造社一般人，起初不是艺术的无上主义者吗？但曾几何时，这一般人全变普罗文学的运动者了。又如鲁迅，他起始是与创造社对抗的，但他现在又与创造派及其他人合组左翼作家联盟了。²⁶

そして1928年に文壇を席卷したプロレタリアの革命文学に対抗して三民主義の「革命文学」建設を呼びかけているが、その内容は農民、工場労働者に基盤を置き、形式の通俗化を目指すなど、むしろ革命文学、あるいは左連初期の大衆化運動のそれに近い。

至于形式方面，则读者既以农工为对象，当然首要通俗，

总之，是要把农工的阶级意识和民族意识 客观化，集团化，具体化，悲壮化呈现于读者之前，以振其斗气而涵养其心情，而于对方要尽量的暴其真相。这便是农工文艺所应具有的条件。至于细微方面，则不同的文学方式，自然就有不同的文学样式，如诗歌与小说，戏剧一是不能完全同一的 何等烦言？这各种文学的细微方面，非本文所能论及・・・²⁷

しかし、具体的にどのように通俗化すべきか、といった課題については引用の通り「本文の論及する能うる所に非ず」として全く論じられてはいない。

続いて論文⑥「国難期間应有的文学」に目を向けてみよう。この論文は、柳条湖事件以後、日々緊張感を増していた日本との関係を背景に、国家の危機における文学の在るべき姿について論じている。

まず、論者は“文学は宣伝のために存在する”と断定し、文学至上主義者からの反論に対しては、時代と共に“美”というものは変わるものである以上、現在の中国では農工階級の立場に立って彼らを満足させられるものこそ“美”である、とする；

那么，我们要以甚么为美呢？我们可以不可思索的说，就是要握住今日的时代，站住不顾一切而终岁劳苦的农工立场上，把他们想说不出的东西，尽情尽意的写出，使他们读了在心灵中感到同情而美满的就是我们在文学上所需要的美。²⁸

そして農工階級とかけ離れた存在である既存の作家に彼らが読むようなものを書くことが出来るのか？と問題提起し、農工階級出身の作家の出現を希望しつつもそれがすぐには実現不可能である以上、既存の作家が農工階級の中に入っていくしかない、と自ら答えている；

只希望作者在艺术,技能成熟后,如亲身踏入感直接探听农工的真情实况,然后把它加以社会化,系统化就好了.²⁹

さらに宣伝の文学は、どうすれば農工階級を目覚めさせ、国難を排することができるのか、その在り様について以下のように提言している；

第一、社会の黒幕を破り社会の前途を示す。

第二、革命の精神をもち、作家はすぐに年中苦しむ農工の中に入っていく、赤裸々に彼らの苦しみを叫びたてるべし。

第三、社会の力を集中すべし。

第四、形式は簡明化すべし。

この形式の問題については、他のところに比べてはるかに言及が少ないが、言語の簡明化を提起するなど、第2章で触れた瞿秋白の主張に通ずる部分も見出される；

我们为宣传而存在的文学,尤其是为唤醒民众的文学,在形式上无论见诗歌戏剧或小说,我们必须系统的,顺着自然的节奏,用简明的文字写出来,使读者读时,毫不觉着艰涩与压倦,就是不识字间接受者,听起来也可以明白。³⁰

以上、論文⑤、論文⑥について紹介してきたが、ここでこの2篇の内容を手がかりに『夜光』における文芸大衆化の受容について検討しておきたい。

まず論文⑤、論文⑥において共通して見出せるのが、“農工階級のための文学”というスタンスである。これは文芸大衆化論の中で大前提となる認識ではあるが、プロレタリア革命文学の段階から既に見られたものでもあり³¹、これが文芸大衆化受容の決定的な証拠であるとはいいがたい。

また、もうひとつの共通点として形式の通俗化・簡明化の主張を挙げることができる。この主張そのものは確かに大衆化論の中で展開されているものではあるが、第2章で概観してきたような上海の文壇で議論され、実践を叫ばれた内容ほどの深みには到達しておらず、単なる呼びかけ、スローガンの域に留まっている。

このように論文⑤、論文⑥の内容を検討した限り、文芸大衆化論が『夜光』誌上で受容されていたとは断言しがたく、むしろ文芸大衆化運動の前段階である革命文学の主張に近いようにも思われる。事実、『夜光』では“大衆”，“大衆化”という言葉自体一度も用いられてはいない。

しかし、当時の山西省において文芸大衆化の思想が全く受容されていなかったというわけではなく、1932年10月には、太原で大衆文芸研究社という組織が成立しており³²、そこには史紀言、楊蕉圃、王中青といった趙の友人たちがメンバー

として参加している。そしてこの事実から、少なくとも1932年の段階で趙の周囲に文芸大衆化の波が届いていたことも確認できる。

ただし、上の一覧で示したように、『夜光』誌上において、彼らは詩や紀行文といった創作を発表してはいるが、文芸大衆化運動に対してまだ何も発言してはいない。

このように、1931年から32年にかけて、『夜光』誌上においては、文芸大衆化論の本格的な受容はまだ為されておらず、趙の友人たちもその主張を消化し、自らのものとして意見表明するほどの段階には至ってはいなかった、という事が明らかになった。ではこうした空気の中、趙は文芸大衆化運動に対し、どのようなスタンスを取っていたのであろうか、次節において考察していきたい。

3.3 「歌生」と文芸大衆化論

第1章で引用した王中青の証言を信じるならば、この時期、趙は文芸大衆化に関する評論を各誌に発表していたはずである。しかし、そうした資料はまだ現在のところ発見されてはおらず、詩歌や小説が数篇確認されているに過ぎない。『夜光』第4期に発表された「歌生」³³は、そうした趙の初期創作のひとつであり、彼の文芸思想の変遷を辿る上でも貴重な資料と言える。

この「歌生」は、長短500句余りからなる長編叙事詩であり、趙の詩作としては「打卦歌」³⁴に続く第2作目に当たる。内容は、表題の通り“歌生”＝歌うたことによって謡われる彼自身の数奇な半生であり；はじめ無実の罪で銃殺に処せられた物乞いが、“逍遥真人”なる仙人に救われ、他者の魂を喰らって憑依する“遊魂”となる。老人、商人、兵士、学生、豪族の娘などに憑依していくうちに戦乱に巻き込まれ、戦乱に苦しむ人々を救おうとしない真人と決別して、自ら戦いの中に身を投ずる、というような幻想性豊かなものとなっている。

従来の研究において³⁵、この作品は反迷信、反封建主義など趙樹理の思想的成長の跡を示すものとして位置づけられていた。では同時代の『夜光』誌上に掲載された他の作品と比較した際、この「歌生」はどう位置づけられるのであろうか？ まずは比較の対照として第2期に掲載された「十字街頭」（左卿）の一部を引用する；

电灯明暗的马路旁
两个孩子吵, 打忙.
年龄 躯体 恰相当,
你我穿戴一个样.

破旧的衣服 漆黑的脸，
 一双鞋靴 漏脚尖
 料炭头歪倒在一边
 一个被两只手抓着胸内，³⁶

このように、石炭殻をめぐって争う貧しい子供たちの姿が五四運動以来発展してきた白話詩のスタイルを用いて描写されている。そして『夜光』誌上に掲載されている数十篇の詩歌も概ねこうした日々の生活や戦乱に苦しむ民衆を題材としており、いずれも白話詩の形式を採っている。

「歌生」も基本的には白話詩の形式を用いており、題材的にも『夜光』誌上の他の作品と変わるところはない。しかし、いざ読み比べてみると、この作品が『夜光』の中でかなり異質な存在であることに気付かされる。

朱弦响丁丁，不留停，
 把我的生平，
 一声声唱向知人听。
 我是一只游魂，
 任便何人的躯壳，我都能留存。

.....

瓶外曰：
 吾乃逍遥真人，
 告汝阴灵：
 吾虽不能驾雾腾云，
 也曾炼就了五百年道行。
 我天师大发慈悲，命我学救苦观音。
 今见汝魂，悲苦凄清。
 汝蒙不白之冤，吾心何忍？
 吾今收汝于瓶，能使汝得再生。³⁷

上の引用は「歌生」の冒頭と“逍遥真人”登場の部分である。歌い手が謡っている“地の文”とでも言うべき部分は、『夜光』の他の作品と同様、比較的現代口語に近い五四期以降の白話が用いられているが、“逍遥真人”が関わる場面などでは、所謂明清以来の旧白話が用いられている。

西欧の影響が強い五四白話文学に慣れ親しんだ趙の世代にとって、もはや過去のものに過ぎなかった旧白話を趙樹理が敢えて使用した理由としては；

- “逍遙真人”に代表される“遊魂”がさまよい、呪符が飛び交う世界を描くのに、五四白話では不自然である。
 - さらに何よりも、趙はこの「歌生」の読者（聴衆）として彼自身を含む知識青年ではなく、農民を想定していた。
- という2点が考えられる。

当時の農民にとって、五四白話は“役人言葉＝官話”に近いものであって、文芸を楽しむ言葉ではなく（当然『夜光』誌上の白話詩・白話小説などは理解不能であったろう）、むしろ講談や演劇に用いられていた明清以来の旧白話の方が馴染み深いものであった。そして、そもそも“真人”を登場させ、“遊魂”を作品の主人公に据えること自体、趙の視線が農民の方に向いていた証拠と言えよう。

このように、『夜光』誌上に発表された詩歌は、いずれも白話詩の形式を用いたもの、すなわち知識青年を対象としたものであったのに対し、趙樹理は一步先んじて農民を読者として意識した作品「歌生」を完成させていたことが明らかになった。

これは趙が上海文壇の文芸大衆化の主張にいち早く応えたようにも見えるが、前節で考察したように「歌生」執筆当時、趙の周囲ではまだ文芸大衆化論の本格的な受容はなされてはいない。従って「歌生」における試みは、文芸大衆化論の影響と言うよりも、趙独自の発想による部分が大きかった、と考えるべきだろう。

しかし「歌生」以後、趙の創作の比重は詩歌から小説に移っていくことになり、詩歌による農村読者獲得の試みは事実上中断される。では彼は小説というジャンルにおいてどのようにその大衆的な作風を獲得していったのか、この問題については次章で考察していくことにしたい。

4. 1933年～34年の趙樹理と『山西党訊』副刊³⁸

前章において分析したように、上海で文芸大衆化運動が盛り上がりを見せていた当時、山西省太原では大衆化論の受容が始まったばかりであり、趙は農村読者の獲得を試みていた。ではその後、文芸大衆化運動は山西の地でどのように展開したのであろうか？

本章では、『夜光』の後、太原で趙の友人史紀言、王中青、楊蕉圃らによって編集・発行されていた新聞『山西党訊』副刊に焦点を当てていく。

4.1 『山西党訊』について

本章において対象とする『山西党訊』は、1933年11月に山西省太原において国

民党山西省党員通訊処の機関紙として創刊され、36年12月まで発行されている。創刊の経緯としては；1931年12月18日、国民党山西省党部によって愛国運動に対する弾圧が行われ、“12.18惨案”と呼ばれる大事件となった。山西省の軍閥 閻錫山はこれに対する民衆の反発を利用して、国民党山西省党部を封鎖し、蒋介石の山西省における勢力を駆逐した。その後閻は、蒋介石に対応するための名目上の組織として1933年9月24日、国民党山西党員通訊処を成立させ、その機関紙として『山西党訊』を創刊させた³⁹、というように、国民党とは名ばかりの「機関紙」であったようである。

この新聞は、A3サイズの4面構成であり、第4面が副刊として主に文芸作品・評論を掲載している。そしてこの副刊の編集に趙の友人である史紀言、王中青、楊蕉圃があたり、彼らの作品発表の舞台となっていた。そのため、この『山西党訊』副刊には、前章で扱った『夜光』以上に趙の友人の手になる評論、創作が多数登場しており、太原における文芸大衆化論の展開と趙の周辺について調査するには得がたい資料である、とすることが出来る。

4.2 『山西党訊』副刊における文芸大衆化論の受容

本節では、『山西党訊』副刊における趙樹理の友人たち－史紀言、王中青、楊蕉圃らの発言を軸に、彼らの文芸思想に大衆化論の痕跡が見出せるかどうか探っていく。

まず、『山西党訊』副刊37号（1933年12月8日）のコラム「毎日漫談」（史紀言）では“文壇情報”として高長虹、王玉堂といった山西省の作家の動向を紹介しており、その中に次のような記述がある；

赵野小（趙樹理のペンネーム）：现在太谷某小任教职，对大众化文艺研究甚力，以尚在笔名在申报副刊及本刊先后有文发表。

また、ちょうどこの時期、趙樹理の小説「有箇人」が掲載されており（12月5日～21日）、連載終了直後の副刊51号（1933年12月24日）には「関于「有箇人」」（忠卿：王中青のペンネームである）という評論が発表された。この中で王中青は次のように発言している；

我知道他是主张文艺大众化的，所以他想避免了欧化的写法，利用中国旧章回小说的体裁，参入新的内容。原则上我是赞同的，并且我也是这样主张的一个人。但是在这篇作品中所表现的技术，不客气的说是失败了。写得是如此简略、松懈，不过后边两节写得很有力量。因此可以把读者的兴趣与注意提醒起来。不然的话，虽然这是一篇忠实的客观事实的暴露，也不能不说是一篇失败的作品。

(傍線はいずれも筆者付す)

これら趙の友人たちの発言からは以下のようなことが読み取れる；

- この当時、史紀言、王中青ら趙の友人は彼の創作活動を文芸大衆化運動の主張に沿ったものであると考えており、『山西党訊』副刊に掲載されていた「有箇人」もそうした試みのひとつであると見なしていた。
- また、趙が文芸大衆化に従事している、と認識している以上、趙の友人たちも既に文芸大衆化論を受け入れ、理解していたと考えられる。事実、王中青も上の引用の中で、大衆化の主張に賛同し、自ら大衆化を主張する一人である、と発言している。

しかし、『山西党訊』副刊に実際に発表されている彼らの文章に目を通すと、1934年8月に楊蕉圃、王中青の間で、どんな状況が創作に向いているか・芸術は“苦悶の象徴”であるとする厨川白村の主張は正しいのかどうか、といったテーマでの議論が為された以外は、文学について論じた文章は存在しておらず、無論文芸大衆化に触れたものは全くといって良いほど見当たらない。

唯一、『山西党訊』第1面の編集を担当していた地下共産党員 李延年が発表した「欧化与大衆語」（1934年8月23日 ペンネームは何化魯）という評論において文芸大衆化の主張を見出す事ができる；

最后,我再声明一句,我并不是在否认了欧化的必要之后,便主张现在的文学,跟了过去的技术走.我只说,不欧化的中国文字也能写出极复杂的情景.从这里我们可以知道了,就是利用中国的言语与文辞,是可以写出好的作品的.由此我们可以得出这样的一个结论,只要你能实地参加在大众的生活里,体验了大众的心情与体态,用大众的语言,是可以产出大众的作品.如果说用大众语写出来的文学,便会放低了文字的价值,那只是护道者的说法.主张大众语的人,是不会承认这些的.假如只住在租界的三层楼上,而主张大众语的文学,无论赞成或反对,都是幻想,都是欺骗。 (傍線部は筆者付す)

このように、この「欧化与大衆語」という文章には、中国の旧形式の利用や、作家自身の思想、言語における大衆化の主張など、上海での文芸大衆化論の内容を踏まえた論理展開が見出せるばかりでなく、大衆の中に入らず租界から主張する大衆文学は幻想であり、欺瞞に過ぎない、といった中央文壇に対する痛烈な批判すら存在している。このことから、1934年8月の段階で、太原の青年たち、少なくとも李延年の中には文芸大衆化の主張は確かに根付いていた、と言う事ができる。

この時李延年は、史紀言、王中青らと同じく山西教育学院に住んでおり、『山西党訊』の編集に加わっていたこともあって、彼らとはかなり近い関係にあった、と言われている⁴⁰。また、史紀言によると、“旧形式に新しい内容を盛り込む”という当時の趙の主張を支持していたのはこの李延年であり⁴¹、彼の大衆化思想と趙のそれはかなり共通する部分があったと考えられる。

事実、彼の何化魯というペンネームは、趙樹理のものであると考えられていた時期があり、1980年に刊行された『趙樹理文集』では、趙の作品の可能性が高いもの、として付録の中に収録されていたことさえあった⁴²。

こうした事実から、1933年～34年の時点において、趙は既に文芸大衆化論を李延年と同程度には受容しており、さらにそれを“旧形式に新しい内容を盛り込む”という形で実践に移そうとしていた、ということが分かる。

では、趙の大衆化の実践は、当時においてはどのように位置づけられるものであったのだろうか、次節において検討していきたい。

4.3 「有箇人」と文芸大衆化論

前節でも触れたように、『山西党訊』副刊には趙樹理の小説「有箇人」（1933年12月5日～12月21日、ペンネームは尚在）が掲載されている。この作品は、処女作「悔」（1929年）・「白馬的故事」（1930年）に続いて書かれた1万字程度の短編小説であり、30年代に発表された趙の小説としては、完全な形で見ることができる数少ないもののひとつである⁴³。内容としては、主人公宋秉穎が閻錫山政権下の農村で借金と相次ぐ重税に追われて没落し、最後に夜逃げをするまでが描かれている。

『山西党訊』副刊には「有箇人」以外にも数多く小説が掲載されており、王中青も数篇発表している。そこで「有箇人」が同時代の作品の中でどう位置づけられるのか考察するため、『山西党訊』副刊に同時期に掲載されていた2篇の小説と比較検討してみたい。

○「老王的結局」仁白 1933年12月4日～12月5日

この作品は車引き老王が街で倒れているニュースから始まり、老王が何故倒れたのか、その苦しい生活が語り手によって回想される。最後に老王が死に、車夫仲間の老李が老王ようになるな、頑張ろう、と宣言して物語が終わる。

形式面に注目すると、典型的な五四以降の近代小説のスタイルを採っており、欧米の小説の影響を受けた詳細な情景描写が各所で用いられている；

漆黑的天空遮盖着大地，更显得那狭小的院子里，黑暗起来，简直是一个人也看

不见. 但是院里的谈话声却好像牛喉似的喊叫着.

○「惨變」王忠卿 1933年12月7日

この作品は“小胖子”という男が借金のかたに自分の子を売り、それを悲しんだ妻が井戸に身を投げる一幕を描いたものである。以下に引用するのはこの作品の結末の一節であり、「老王的結局」同様、中国の近代小説の文体を採用していることが分かる；

沉静的空气, 像投了个炸弹似的爆裂了. 一幕惨剧在这惨酷的人间排演了.

このように、2篇ともに情景描写を多用した五四以降の近代小説のスタイルを採用し、また悲惨な生活を送る民衆をテーマにしている、そしてこれは『山西党詠』副刊に掲載された他の作品にも共通するものである。

一方、「有箇人」は、テーマこそ農民の没落を描いており、『山西党詠』誌上の他の作品と変わるところがないが、その採用している手法は、五四以降の中国の近代小説と比べてかなり異質なものである。以下にその特徴を挙げる⁴⁴；

- 描写を徹底的に排し、物語の叙述を優先する

据村人说, 秉颖女人是村中的第一个. 真的, 这村中恐怕谁也不及她, 就是别处也不可多得.

これは主人公宋秉穎の妻について語った部分であるが、彼女の容貌に関する描写は全く無く、他にも情景描写などが用いられる場面は皆無と言っている。語り手はひたすら物語を語り続けている。

- 直線的な物語構成

「有箇人」においては回想、謎解き、といった時間の錯綜は存在せず、主人公の没落が物語世界の時間順序通りに語られている。

- 物語世界外の語り手の顕在

有个人姓宋名秉颖; 他父亲是个秀才. 起先他家也还过的不错, 后来秀才死了, 秉颖弄的一天不如一天, 最后债主逼的没法, 只得逃走. 完了. 假如比较详细点说, 原来是这么一回事:

これは「有箇人」の冒頭部分であり、物語の語り手が登場して“これから主人公の没落を詳しくお話します”と自らの存在を主張している。

こうした「有箇人」の特徴は、趙のデビュー後の作品にも共通して見出されるものであり⁴⁵、五四以降、知識青年層に受け入れられていた近代小説の手法と言うよりは、むしろ数百年来農民が親しんできた講談や章回小説のそれに近い。前節で引用した「関于「有箇人」」において、王中青はこの作品を章回小説の形式

を用いていると評しているが、この作品の形式・物語の構成は単に章回小説の方法を摸倣したものではなく、趙が農村読者獲得のために彼らの好むスタイルを取り入れて創造した、と言うべきだろう。

以上、『山西党訊』における「有箇人」の位置付けについて考察してきた。その結果；1933年から34年の段階において、『山西党訊』の編集に関わった趙の友人たちは文芸大衆化の理論を受け入れ、それを自らの主張としていた。しかし、『山西党訊』紙上に発表された小説は、依然として西洋近代文学の影響を色濃く受け、知識青年層をその主な読者とする近代小説のスタイルを採用したものばかりであり、大衆読者の獲得は全くと言っていいほど実践されてはいなかった。一方、趙樹理は「有箇人」において物語の叙述の優先、顕在する語り手など、後年大量の農村読者を獲得した彼独自のスタイルを完成させつつあった、ということが明らかになった。

こうした趙の試みからは、この当時彼が既に受容していた文芸大衆化論の内容と共通する部分が見いだされる。とりわけ【描写を排した物語の叙述の優先】という特徴は、趙自身の証言が存在しないため断言はできないが、茅盾が瞿秋白への批判の中で主張した；旧小説が大衆を捉える原因は、言語よりもその行動を中心に置く描写法にある、という指摘⁴⁶にヒントを得たのではないかと推測される。

5. 結論

以上、1930年代前半の太原において、趙樹理及びその友人が文芸大衆化論を何時どのように受容し、そしてその主張をどの程度まで実践してきたか分析してきた。その結果；

- 1930年、上海で始めて提唱された文芸大衆化論の主張は、趙及び彼の友人の間では、『山西党訊』副刊を編集していた1933年～34年の段階において概ね受容されていた。
- しかし、その主張を実践するのは、上海よりもその機会に恵まれていたはずの太原にあっても難しかったようである。趙の友人たち及び周囲の人々の作品は、内容的には苦しい生活を送る大衆を描いたものが多かったとは言え、それは当時の知識青年にしか理解できないスタイルで書かれており、彼らは大衆化を声高に叫んでも、その作品は大衆のもとには届いていなかった。
- そうした中、趙樹理は、大衆化論を本格的に受容する前の段階で農村読者を獲得するための試みを始めており、大衆化論の受容後、「有箇人」(1933年)

という作品において、後年の趙の作品に通ずる“大衆的”と評されるスタイルをほぼ完成させていた。

という事が明らかになった。

そして今回明らかになったこうした事実は、少々食い違う部分があるとはいえ、第1章において引用した趙自身が榮安に語った内容に比較的近いことに気付かされる、再度ここに引用して検討してみよう；

趙樹理同志说：“在十五年以前（1932年を指す、筆者）我就发下洪誓大愿，要为百分之九十的群众写点东西，那时大多数文艺界朋友虽然已倾向革命，但所写的东西还不能跳出学生知识分子的圈子，当然就谈不到满足广大劳动群众的需要。根据我自己的志愿，一九三三年我在太谷当教员时，曾写过一部长篇小说，名字叫「盘龙峪」，是描写农民和封建势力作斗争的故事”

このように、趙の農村読者獲得の試みが1932年（すなわち「歌生」発表の年である）に始められたこと、そして当時の友人たちが文芸大衆化の主張を受容しながらもその実践には踏み切っていなかったこと、などは本稿の分析に符合している。しかし、農村読者獲得の試みの成果としては、1935年に発表された「盤龍峪」にのみ言及し、「有箇人」については全く触れられてはいない。

但し、この「盤龍峪」は実は1933年、「有箇人」と同年に執筆が開始されたと見做されており⁴⁷、趙が後年“大衆的”と評されることになったその独特のスタイルはやはり1933年において完成した、と見るのが妥当であろう。

では最後に趙樹理と文芸大衆化運動の関係について筆者の私見を述べた上で筆を擱くことにしたい。

本稿の冒頭でも触れたように、デビュー当時から現在に至るまで、趙の文学に対する評価には“大衆的”，“大衆化”という言葉が用いられてきた。そしてそれはデビュー前の1930年代初めにおいても同様であり、趙の友人たちは当時の彼を“对大众化文艺研究甚力”，“他是主张文艺大众化”と評している。

しかし、第1章の引用からも明らかなように、趙樹理自身は一度も“大衆化”という言葉を自らの文学に冠してはいない。第3章で分析したように、趙は文芸大衆化運動が山西省の地で本格的に受容される前の段階から、既に農村読者の獲得の試みを始めていた。そして1933年に「有箇人」を完成させ、「盤龍峪」の執筆に取り掛かっていた時、文芸大衆化の主張は確かに趙に多くのものを与えたであろうが、趙樹理は自らの創作活動を文芸大衆化運動に出会う前から目指していたものとして一線を画したかったのではないだろうか。

- 1 本稿において用いる中国語の繁体字、簡体字は、引用部分を除いて“趙樹理”，“文芸”というように、出来る限り日本語の新字体で表記することとする。
- 2 「論趙樹理的創作」1946年8月26日『解放日報』 『趙樹理研究資料』（北岳文芸出版社1985年 以下『研究資料』）所収。
- 3 「談趙樹理」1979年1月4日『天津日報』 『趙樹理研究文集』（中国文聯出版公司1996年）所収。
- 4 『趙樹理小説全集』（下） 時代文芸出版社 1997年
- 5 『中国現代文学30年』 銭理群、温儒敏、呉福輝 北京大学出版社 1998年 p475、
『中華文学通史』第7巻 華芸出版社1997年 p315
- 6 『研究資料』所収 p30
- 7 「回憶歴史 認識自己」 『趙樹理全集』（以下『全集』）5巻 p385
- 8 この「盤龍峪」が発表されたのは、1935年『中国文化建設協会山西分会月刊』誌上でのことである。
- 9 『研究資料』所収 p254
- 10 『趙樹理年譜』（董大中 北岳文芸出版社 1994年 以下『年譜』）p60
- 11 『研究資料』所収 p12
- 12 『研究資料』所収 p47
- 13 北岳文芸出版社 2000年
- 14 文芸大衆化運動の流れについては以下の文献を参考にした：
『中国現代文学三十年』（修訂本） 銭理群、温儒敏、呉福輝 北京大学出版社 1998年
「左連前期における文芸大衆化の問題」丸尾常喜 『東洋文化』52 1972年
「文芸大衆化論の展開」杉本達夫 『目加田誠博士古希記念中国文学論集』1974年
- 15 「普洛大衆文芸的現実問題」，「大衆文芸的問題」この2篇の内容はほぼ同じである、注14丸尾氏によれば、前者が掲載された媒体『文学』の発行部数が少なかったため、『文学月報』で再論したと考えられる。
- 16 「大衆文芸的問題」本稿では、『文学運動史料選』第2冊（上海教育出版社1979年 p391）所収のものを参照した。
- 17 同上 p396
- 18 同上 p398
- 19 「問題中的大衆文芸」『文学運動史料選』第2冊 所収
- 20 同上
- 21 「文芸大衆化論の展開」杉本達夫
- 22 北京大学図書館所蔵のものを閲覧させていただいた。ここに厚く御礼申し上げる。
- 23 『年譜』 p76
- 24 書目文献出版社 1981年
- 25 北京大学出版社 2000年 主編：伍傑
- 26 『夜光』第3期 p16
- 27 同上 p21

- 28 同上 p27
- 29 同上 p28
- 30 同上 p31
- 31 成仿吾「从文学革命到革命文学」『創造月刊』第1巻9期 1928年2月
- 32 『年譜』 p82
- 33 初出は1932年3月12日太原『民報』
- 34 1932年1月『北平晨報』に発表された。
- 35 「趙樹理の佚詩『歌びと』」董大中 釜屋修訳 『野草』35号 1985年
- 36 『夜光』第4期 p36
- 37 同上 p12
- 38 北京国家図書館所蔵のマイクロフィルムを閲覧させていただいた、ここに厚く御礼申し上げます。
- 39 『年譜』 p87
- 40 「趙樹理筆名考釈札記」董大中『現代文学研究叢刊』1988年2号
- 41 「趙樹理同志生平紀略」『汾水』1980年1月号『研究資料』所収 p75
- 42 『趙樹理文集』第4巻 1980年 工人出版社
- 43 1935年『中国文化建设協会山西分会月刊』に発表された「盤龍谷」は第1章のみ。
- 44 詳しくは拙稿「趙樹理文学における“故事性”」（『島大言語文化』13号 2002年）を参照いただきたい。
- 45 詳しくは拙稿「趙樹理文学の変容」（『島大言語文化』15号 2003年）を参照いただきたい。
- 46 注19に同じ。
- 47 『年譜』 p95